

第11回 最新映像で見るイラクの今

日時 9月15日(水)午後7時～8時30分
会場 龍谷大学大阪梅田キャンパス研修室
講師 玉本 英子
ジャーナリスト/アジアプレス・インターナショナル
(URL: <http://asiapress.org/>)

今回、講師を務めていただいた玉本さんは、2001年アメリカで同時多発テロが起こった直後、初めてイラクに入りました。

イラク開戦から7年、イラク第二の都市モスルを拠点に、「現場を見て、人々の声を聞かなければ何も分からないという思い」から毎年イラク取材しています。



イラク戦争の経過

2003年、英米軍は大量破壊兵器を持つとされたイラクを空爆し、攻撃を開始しました。日本も支持しています。そして米軍と武装勢力の戦いが始まり、その後イラク国内のシーア派とスンニ派の武装抗争が起こり、イラク人同士の殺し合いとなりました。2007年2月には、米軍とイラク軍は武装勢力掃討戦を開始、武装勢力はバグダッドから地方へ逃れました。これによりバグダッドは治安が比較的良くなった一方で、地方の治安が悪化しました。特に悪化したモスル市では、玉本さんは、安全のためイラク軍に同行して行動せざるを得ませんでした。

イラク第二の都市モスルの状況

チグリス川が市内中心部に流れるモスルは、緑豊かな街です。フセイン政権崩壊後、フセイン元大統領の息子たちがかくまわれた場所でもありますが、2003年米軍などの攻撃により殺害されました。反米感情が強く、現政権に反発する人が多い街です。また治安が非常に悪いため、女性が一人で出歩くことは大変難しく、仕事ができずにいる人が多いです。

モスル市内の道路には、約200mごとに検問所があり、いたるところで渋滞が起きています。検問所では、「爆弾・火薬・違法物」の持ち込みがないかを調べられます。目的は、武装勢力からの攻撃防止です。実際に持ち込みをしようとする人々の表情、焦りや戸惑いなどを見抜くことで、数多くの攻撃を防止しています。検問所を多く設けることも、攻撃防止の効果があります。

仕掛け爆弾の爆発に遭遇

イラクでの主な攻撃方法は、仕掛け爆弾と自爆攻撃です。仕掛け爆弾は道路などに爆弾を仕掛け、爆弾の上に車が通った瞬間、リモートコントロールを操作して爆破します。つまり、車ごと爆破させます。また爆弾には、中に釘などを入れ、爆破した際に釘がささり死傷者を増やすといったものや、強力な磁石に爆弾を巻きつけ、車につけ爆破させるといったものもあります。実際に玉本さんは車で移動中、仕掛け爆弾の爆発に遭遇しました。たまたま爆弾の威力が小さかったため、車の底が抜けることもなく、また誰も被害に合うことはありませんでした。

そんな仕掛け爆弾を処理するため、イラクには爆弾処理班が組織されています。爆弾処理班は仕掛け爆弾を発見すると、爆弾処理ロボットを使用し、爆破できる場所まで運びます。このロボットには4つのカメラが装着され、カメラの映像を通して操作されます。しかし爆弾処理すべてをロボットがするのはなく、リスクのある銅線を切る作業は爆弾処理班の隊員が直接おこないます。また同じ場所に2つ以上の爆弾が仕掛けられていることも多く、処理している最中に別の爆弾が爆破することがあります。そのためリスクはかなり高く、昨年だけでも120人のうち15人の人が亡くなりました。そんなリスクの高い仕事ですが、彼らは毎日ルートを変えながら捜索を続けています。

イラク住民の思い

戦争により治安が悪化し多くの人が職を失い、仕事を求めています。イラクの平均月収は、約6万5千円です。

しかしそれ以下の収入で生活をする人も多く、厳しい生活を余儀なくされています。そのような生活苦の人たちが暮らしていくために、武装勢力に協力をしてしまう人も少なくありません。武装勢力はモスク（イスラム教の礼拝堂）で、協力するよう声をかけます。例えば、爆弾1つ仕掛けると報酬がもらえるといった仕組みです。また一度協力すると、脅しによりやめられなくなるのが現実です。

イラク軍は、このように協力をしている住民を武装勢力から引き離すために、貧困地域を中心に無料の医療サービスの提供や、一般家庭に食料やお菓子を配る活動をしています。こういった取り組みにより、イラク軍に不満があった人々もイラク軍に頼るしかないなど、思いに変化が表れています。

米軍に武装勢力の情報を提供するイラク軍

イラクでは2009年の夏にアメリカ軍の都市部からの撤退が決まっていました。しかしモスルの現状は、市内の基地ではアメリカ兵が残り、活動を続けていました。またイラク軍の基地に、米軍の行き来があります。それだけでなくイラク軍は米軍に対し、イラク人のだれがどこの武装勢力に協力をしているのかなどを、報告しています。このようなことから、市内から完全に撤退したとはいえません。では、なぜアメリカ軍は撤退しないのでしょうか。それはイラク軍が弱く撤退後、軍だけで国をコントロールできるのかなどといった住民の不安もあります。イラク軍が撤退の延期を希望していることもあります。

日本のNGOがクルド自治区で医療支援

戦争は、多くの子どもたちにも影響を与えています。戦争により、資金も医師の数も足りません。また、日本と同様程度に医療が充実しているともいえません。そのため、例えば白血病にかかったとしても、どの種の白血病なのか診断することができないため、適切な治療を行うことができません。病院には、ここでは治療することのできない病気で苦しむ人々の姿があります。海外からは医療機器が寄付されますが、その機器が壊れた場合、修理するという意識がないため、ゴミになっています。物を送ることは比較的簡単ですが、その後のケアがなされないのであれば、それは一方的な支援なのではないでしょうか。また日本のNGO（JIM-NET）から看護師派遣など医療支援が行われています。住民が何を必要としているのか、意味のある支援が求められます。

急増する売春婦たち

玉本さんが訪れたトルコ国境近くにあるドホークの女性刑務所には、収監されている30人中、半分が売春の罪で捕まっていました。彼女たちは、治安の悪いバグダッドやモスルに比べると治安が良いとされるドホークへ出稼ぎ



に行き、捕まりました。また売春をしていたのは、10代から40代の女性たちです。イラクでは教育を受けていない女性が仕事をするのは難しいため、最終手段に売春を選ぶ人もいます。

最後に、玉本さんは「2011年イラクから米軍撤退により、完全にイラク戦争は終わったと思われ、イラクへの関心が薄れてしまうことがとても怖いです。またこういったことに関心を持ち、NGOなど現地で活動されている人も多いので、彼らの声に耳を傾けてください。」と訴えられました。

玉本 英子（たまもと えいこ）

1966年東京生まれ。デザイン事務所勤務を経て、94年よりアジアプレス・インターナショナル所属。イラクやトルコなど中東地域を中心に取材を続け、テレビ、新聞、雑誌にて発表している。2004年、ドキュメンタリー映画「ザルミーナ・公開処刑されたアフガニスタン女性を追って」を監督した。共著に「アジアのビデオジャーナリストたち」などがある。

アジアプレス・インターナショナル

文章や写真、映像を通して、アジア、そして世界の様々な問題を伝えていこうとするジャーナリストの集団